

奈良

いのちの電話

2020 新年 第379号

社会福祉法人 奈良いのちの電話協会

事務局/〒631-0816 奈良市西大寺本町8-27



TEL : 0742-35-0500

FAX : 0742-35-0533

e-mail : nid@nara-inochi.jp

特集 私のいのちと祈りの風景

保山 耕一氏

赤膚焼
奈良絵菓子器
古瀬堯三
作



時に初春の令月にして
氣淑く風和らぐ

万葉集梅花の歌三十二首の序文より

風鐸



新年明けましておめでとうございます。今年も頑張るぞ、と決意を新たに令和2年を迎えたところです。それにしても年々早くなる(気がする)新年の到来に、果たして自分はこのままで良いのかと心配になっています。

昔は年が改まると年齢が増える「数え年」でした。しかも1歳から始まる、となると私は現在57歳。明治生まれの祖父なら、ちょうど定年を迎えている頃です。社会人になりたての20代、40人ぐ

らいの職場にいる50代といえば支店長ただ1人でした。

すでに鬼籍に入られた鹿児島県出身の支店長のことを時々思い出します。とても貫禄があり、人心掌握に長け、かつ頭が切れて、いつもにこやかな人情味溢れる偉大な上司でした。結婚式にも駆けつけていただき、その後、会社を移られた後も色々悩みを聞いてもらった、まさに恩人と言っても良いと思います。

あの支店長の当時の年齢を超えた今、自らが部下や後輩からどのように見られているのかを考えると、その違いにどうしようもない気持ちになります。しかし世は流れ、一般企業の定年は大体65歳。

中小企業経営者、自由業に定年があるとは言えません。さらに努力する時間が与えられたと考えるべきでしょう。

もしタイムマシンがあったら織田信長に会ってみたい。そんなことをブログに書いたことがあります。さらにこう思います。28歳でタイムマシンに乗って未来の50歳の自分に会えていたらどう映ただろうか? いやいやあり得ないことを考えても仕方ありません。

新年早々つまらない初夢を失礼しました。人生一度きり。自分の人生をできるだけ肯定して前向きに生きることが大事なのでしょう。(樹)

奈良いのちの電話設立40周年記念講演会



私のいのちと祈りの風景



保山 耕一 氏

保山 耕一 氏 プロフィール



1963年生まれ。奈良県在住。2013年に直腸がんを診断され、現在も治療を続けながら「奈良には365の季節がある」をテーマに撮影を続ける。ムジークフェストなら2017にて「千住真理子 & 保山耕一、音楽と映像で巡る奈良」を開催。奉納作品「私の命と春日の神様」をなら国際映画祭2018にて上映。2019年、銀座プロッサムにて千住真理子さんと「音楽と映像で巡る奥大和」を開催。奈良を撮影した作品が評価され、第7回水木十五堂賞を受賞。2月、NHK「こころの時代」出演。

奈良いのちの電話は昨年11月1日に設立40周年を迎えました。その記念事業として奈良県在住の映像作家 保山耕一氏をお迎えして、お話と映像を見せていただく公開講演会を開催しました。誌面では保山氏のすばらしい映像は紹介出来ませんが、お話の一端を紹介します。

.....

こんにちは、保山耕一です。私は病気のこと、命のことを話すのは苦手です。これを最後にしようと思います。一歩前へ進むための区切りにしようと思います。

仕事をしていた時の自分はホンマに嫌な奴でした。テレビカメラマンという仕事は、言わばイス取りゲームのようなもので、高卒でフリーの自分にとってその席は並大抵の努力では手に入らないものでした。実力をつけながら30年間やってきました。だから病気になる前の自分は調子になり、恐いものなしの状態でした。そんな6年前のある日、突然直腸癌で倒れ、余命1ヶ月と宣告されました。東京の癌センターで直腸全摘出のあと抗癌剤投与とリハビリで半年間の入院治療が続きました。当時の私にとって何が一番しんどかったかと言うと、病気は仕方がない、けれど社会と全く繋がっていないということが一番辛いことでした。誰とも繋がらず、真っ暗な深い闇の中で漂っている、生きているのに生きている実感が無い。楽に死ぬる方法をネットで検索したり、自分の人生をどう終わらせようかと考えたりしていました。そんな中、ちょっとでも生きていることを実感したくて、自分には何が出来るかと考えました。そして自分には撮影することしか出来ないと思いました。安物のカメラを抱え撮りたいもの

を撮りに行こうと。そして今までは気づけなかった素晴らしい奈良に出会ったのです。365日こんなにも四季の表情が豊かなところは、世界の中でも日本の中でも奈良しかありません。

気がついたら吉野山へ登っていました。死に場所を求めていたのかもしれませんが。如意輪寺の加島典子さんが私をひとりの人間として迎え入れてくれました。初めて人と人として話を聴いてくれました。その後別の寺、櫻木坊ですごい書に会いました。



書から出てくるエネルギーに心が揺さぶられました。それは3年前に19歳で他界された住職の息子さん、小学1年の時に書かれたものです。こんなにも人の心を動かす作品を自分は残してきたかと自問しました。そして今までの仕事への思いを1つの作品にしました。

映像 **桜とともに生きる**

この作品を観た多くの人に喜んでもらった時、こんな自分でも社会の役に立つことができるんだと心に灯りが点ったように感じました。それまで抱いていた孤独感が癒され、勇気を持って生きていけると思いました。撮影のために一番多く通ったのが春日大社です。当時の権宮司 岡本彰夫さんや多くの人との出会いで気づかされたことがあります。「思い込みはやめよう、自分は癌患者なんだと自分にすりこむのはやめよう、どこを向いて生きるのか」と。

映像 **春日大社の藤の花**

30年間で一番咲いたといわれた春日大社の藤の花を撮影していた時、癌が肺に転移しました。手術は出来ない、3年生存率5%以下と言われ、恐くて恐くてしかたありませんでした。でもどれだけ辛くてもしんどくても撮り続けました。撮影してる時だけは病気のこと死ぬことも忘れられました。早朝の奈良、太陽の下いろんな命が光り輝いている、動

物も植物も、石ころですら命に見えた。そういう風景を目の当たりにして、自分もその中の同じ存在だと気づきました。そしてすべてのものがいつか死んで消えてなくなる。「今輝かないつ輝くねん」と言われているような気がしました。一日が一瞬。今があるのが嬉しいです。

映像 神々の夜明け

いろいろな人との出会いがありました。出会いがあるから、誰かに認めてもらえることが勇気につながり、先に進めたと思います。歌手のさだまさしさんから奈良で作るビデオクリップで私の映像を使いたいとの突然の依頼がありました。私が提案した春日大社での奉納演奏の案が採用されました。そして撮影。深夜0時、神の時間帯。そこに存在するのはさださんと私と神様だけです。私の求めていた「宇宙」がそこにはありません。

映像 生生流転

自分はこの役目があったから生かされていると思いました。病気になって、私の生命は人から、神から、社会から与えられた生命であると実感しました。これからの人生は感謝の人生だと思っています。

映像詩 平城宮跡 足あと

これは氷置晋さんという人が私をイメージして作った曲です。若いアーティストと出会い、若い人の夢を支えられることは嬉しいことです。

最後に桜の話をする。私は30年以上こだわりを持って桜を撮り続けてきました。今年で終わるのか、もう1回もう1年と思うが自分で決めることは出来ない、自分が一番不幸だと思っていました。でも桜の映像を観た人たちそれぞれがいろんな状況を抱えて生きていることを知り、みんな大変なんだと気づかされました。

映像 散る桜

桜は来年咲くために散っています。私は、癌になって6年、何で自分は生きているのか。癌で全てを失くし空っぽになったからこそ新しい生命を与えられています。自分の役割を全うしたいと思います。

映像 桜 <「故郷」の曲にのせて>



(M・A)

情報化社会のなかで考える

出会い 19

— 会うは別れの始めなり —

元奈良いのちの電話協会認定委員

谷本 初美

それは、子育てに一段落した頃のことでした。心理学が盛り込まれた講座の募集が目にとまりました。会場は生駒のハイオービスのスタジオとのことで思い切って参加してみました。大勢の人でスタジオの中に入りきれず、別室で中の様子が映し出される画面を見ての受講でしたが、「人間の心」をテーマにした内容が私には新鮮で興味が沸いたことと、お世話してくださる女性たちの優しい振る舞いと生き生きと輝いて見える姿にひきつけられ、びっしり組み込まれた講座のベルトコンベアに乗って、私の「いのちの電話」が始まりました。今でも当時の講座の中で、河合隼雄先生や山中康裕先生の「感性を磨く」「自分を知る」をテーマにしたグループワークは印象に残っています。受講しているうちに、それまでとは違ってとらわれることが少なくなり、心の中が自由になっていくような気がしました。

事務局が組織され、私は研修関係のサポートをさせていただきます。さまざまな勉強会が開かれるなかで、実際の相談の受け方の勉強では東山弘子先生や青木健次先生から、相談を受けることの意味、難しさ、深さを学びました。特に相談ボランティアとして一期一会の向き合い方については、「自分を知る」ことに繋がって深い学びとなりました。たとえば「心を白紙にして聴いたことだけを描いていくと像が出てくる」「どんな気持ちで言っているのか心の声を聴いていく」「相手との距離感をしっかり持って聴く」「どこまで黙って聴けるかが大事」「百回同じことを訴えられたら百回聴かせていただく」などという言葉が心に残っています。

設立当初から研修関係に携わっておられた藤原容子先生は、西沼啓次先生、藤掛永良先生とご一緒に奈良いのちの電話の細やかな研修システムを作り上げて、実際に研修をするときには常に研修係の私たちと同じ立場に寄り添って、ものの考え方や処理のしかた、人との付き合い方などを厳しく温かく、身をもって示してくださいました。協会を退かれてからは、ご自身の体と対話しつつ、社会資源の助けを借りながら過ごしていらしたことを知り、その柔らかいお姿に、私自身の老いへの不安が少なくなりました。その藤原先生も昨年の6月に旅立たれ、お世話になった方々の多くも旅立たれ寂しくなりました。「会うは別れの始めなり」と申しますが、歳を重ねるにつれて、出会いの思い出が小さな消えない灯りのように私の心にしみじみと広がっていきます。